

環 83

KAN
建材ニュース

インタビュー

a view of architect

— 建築家の視点

平田 晃久氏

〈特集1〉ファイアライト®とビル建築

〈特集2〉防災視点とファイアライトプラス®



表紙 ZOZO本社屋 [千葉県]

設計: 中村拓志&NAP建築設計事務所+竹中工務店

使用製品: ファイアライト®

ファッション通販サイト「ZOZOTOWN」を運営する株式会社ZOZOの本社屋。

「想像と創造の行き交う街、西千葉」をコンセプトに掲げています。

開口部を多く取った執務スペースの開放感が特徴の一つ。社員同士はもちろん、

街と会社とのつながりを生んでいきたいという想いが伝わってきます。

ファイアライト®は、エントランスホールの吹抜けに採用されています。

INDEX

02 〈インタビュー〉
a view of architect — 建築家の視点 平田 晃久氏

07 〈特集1〉ファイアライト®とビル建築

15 〈特集2〉防災視点とファイアライトプラス®

〈実例紹介〉

25 ガラスレンガ 慶應義塾大学 三田キャンパス東別館 [学術資料展示施設]

ファイアライトプラス® モトーレン神戸 ハーバー神戸支店
マルサンカクシカク ソトエ
タルト専門店○△□ [エキマルシェ新大阪Sotoe]

■Photo Credits

Dean Cheng: P02, P04 (Taipei Roofs) Daici Ano: P03~04 (太田市美術館・図書館)、P05 (東戸塚教会)

Nacasa & Partners: P05 (nine hours大手町)、P06 (榎屋本店) 鳥村鋼一: P06 (Coil) Luca Gabino: P02・P06 (平田氏写真)

Vincent Hecht: P07~P08 (窓以外)、P10

大丸副史: P08 (窓)、P09、P11~13、P15~18、P19~20、P21~22 (品川区立後地小学校)、P23~24

川澄・小林研二写真事務所 中村隆: P19 (外観) 小河英明: P26 (モトーレン神戸 ハーバー神戸支店)

誌名 【環】について

建材ニュース【環】の誌名は、まるい「輪」の形にちなんでおり、設計事務所・建設会社・メーカー・販売店が手をつないで「輪」となることを目指して名づけました。また、円満の「円」にも通じるような、皆が満ちて豊かになるという想いも込めています。

a view of architect — 建築家の視点

大好きな虫を探して自然の中に分け入った幼少期が

建築を志す原体験とおっしゃる平田晃久氏。

生き物としての人間とその活動を捉える言葉が印象的で、

さながら生物学者のような語り口でした。

人工／自然の区分を超える建築のあり方についてお聞きしています。

interview

平田 晃久氏





太田市美術館・図書館(群馬県)



Taipei Roofs(台湾)

生成する生命活動の一部としての建築。

「かがくしゃ」に憧れる 昆虫少年から建築の道へ。

田んぼや雑木林が身近にある大規模なニュータウンで育ちました。虫捕りに夢中な子どもで、科学者と化学者の区別がつかないながらも漠然と「かがくしゃ」に憧れていたんです。大学は生物学科を目指していましたが当時はバイオテクノロジーが流行し始めた頃で、自分がその道に入ると周りを気にせずどんどん突き進んでしまうような怖さを感じた(苦笑)。それで大学を受験する直前に「四角くて人工的で息苦しい建築ではなく、自然に近い建物を自分でつくれるんじゃないか」

と思って建築に方向転換したんです。

大学の修士課程の時に伊東豊雄建築設計事務所で面接を受け、「また声をかけます」と言われていました。ところが全然連絡がなくて焦りが出てきた時に、伊東さんが審査員長を務める日本電気硝子さんの空間デザインコンペを知った。伊東さんの事務所に入るために、将来を懸ける気持ちで取り組んだことを覚えています。結果金賞をいただきましたが、それがきっかけで事務所に入ったわけではなく…。ちょうどコンペに応募した頃に、事務所から「アルバイトに来てください」と。金賞は関係なかったけれど、実は、コンペの賞金があったから上京できました。不思議なものです。

偶然のからまりが 起こりやすくなる基盤づくり。

伊東さんの事務所に入りたいという想いを強くしたのは、「せんだいメディアテーク」のコンペ当選案でした。チューブで支えられたいくつかのスラブがあって、そのスラブごとに図書館・ギャラリー・スタジオなど異なるメディアのための場所が設けられていた。森の中がそのまま建築になったみたいで衝撃的でした。伊東さんは非常に鮮やかに「自然環境のような建築物をつくる」ことを提示されたけれども、ある意味、近代の建築が持っている強い空間の中で自然が展開しているようにも思える。僕ら新しい世代としては、そこを乗り越えるべきではないかと。空間が先あってその中で自然を再現する発想法ではなく、もっと一から、まるで生き物が発生してくるように建築をつくることができなかと考えました。

自分の設計方法を「からまりしろ」という言葉で表現しています。自然界ではわずかなきっかけで何かからまって、そこにまた何かからまって…と繰り返しながら生態系の複雑な

秩序が形成されていきます。たとえば、海底にあるデコボコした岩に海藻がからまって、からまった海藻に魚の卵がからまる。海藻は魚の卵の「からまりしろ」で、海底の岩は海藻の「からまりしろ」。人間の活動のための基盤をつくるのが建築であるとしたら、建築はほとんど岩や海藻と同じようなものではないでしょうか。

また、人間の日常生活・生命活動を上空から俯瞰すると、人間が地表面をモコモコ動く様子は微生物の動きのようで、人間の活動によって地表面が発酵しているように見えると思うんです。建築を生き物として捉えるのはゆえに過ぎないんじゃないかと言われることもありますが、人間が移動するとともに農耕をしたり都市をつくることで地面の状態がどんどん変化していくこと自体、生きているように思える。近代建築で空間という概念ができて、人間が建築をつくる営みが、大きな自然の一部としての営みから断ち切られた。「こういうカタチの建築をつくってやろう」と明確な意図を持って取り組むより、生き物の動き・営みに近い感覚でもう一度自然の側に戻すような建築のあり方を模索しています。

協働作業で発見される 多様な豊かさ。

仕事を始めた頃は、建築はひとりで作るものだと考えていましたが、伊東さんに声をかけられた陸前高田の「みんなの家」で、乾久美子さん、藤本壮介さんという非常に個性的な二人と一つの建物をつくることになった。建築家同士の強い個性がぶつかり合うと、うまくいかないことがあります。しかし、陸前高田の場合は地元の人たちがその建物を「何の目的でどこに建ててどんな場にしたいのか」というのを結構リアルにイメージされていて、建築の役割と共通の目標を明らかにしてくれたんですね。そこから一気にまとまりました。

それまでは与条件があり、それをクリアした上でより魅力的な提案をするのが建築家の仕事であると思っていました。ところが、最初から機能が決まっているのが建築の原型ではなく、何がつけられるのかも含めて全部一緒に立ち上がってくる…そういうことが理想的なんだと陸前高田で感じました。公共建築は特に、そこに集う人たちの意見を聞くことが理想的。何十万人もの人口がいる街だとなかなか難しくはあるのですが、少なくとも僕らが住民に憑依したつもりで想像するより、街の人たちと混じり合って一緒に考えるほうがいいに決まっています。

太田市美術館・図書館のプロジェクトでは、車中心の生活で駅前の賑わいが奪われている、歩いて楽しい街を何とかして取り戻したいという切実な危機感が市民の間で共有されていました。そんな背景もあり、ワークショップの形式で市民を巻き込んでみようと思ったんです。基本設計の期間が5ヶ月と、この規模の建物の割に非常に短かったこともあり、ワークショップを終えてから基本設計案を仕上げる時間的な余裕はなかった。そこで、設計初期のスタディの段階からワークショップでオープンにし、その場で決めていくことにした。一緒に考えるからライブ感があって楽しいし、行政の担当者、美術や図書の専門家など建物に関わるすべての立場の人が同席したので、決定事項に対して行政の担当者が敬意を持って受け入れてくれました。設計事務所で作ったものを持っていろんなところに根回しする手間が要らなかった分、時間短縮につながった面もある。延べ300人も市民が関わったので大変でしたが(笑)。いくつかのRCの箱とその周りを鉄骨のスロープがぐるぐる巻き付いて美術館と図書館が混ざっていく基本構成は最初から変わっていません。ただ、箱の高さや置き方などのわずかな違いで、それぞれの人がそれぞれのおもしろい場所を見つける可能性が広がった。僕の言葉にすると「からまりしろが増えた」。建築家や設計事務所だけで考えたのとは全然違う豊かさが100人、200人の目を通して見つかるのは、おもしろかったですね。



Coil(東京都)



樹屋本店(新潟県)

時代の断層・ノイズの共存で 新しいという概念を新しく。

古いものや既に誰もが知っているものでも、コンピュータで解析した膨大なデータが介入したり三次元の造形が介入したり、現在のテクノロジーがからまることでさまざまな時代の断層やノイズが入り込んで共存する。そんなふうにして新しいという概念を新しくしていきたい。

たとえば、木。材木を三次元技術で組み合わせて、これまでなかった有機的な編み物のような構造体をつくっています。前近代的な強い物質感を持つ木と現代的でクールな素材であるガラスを共存させて、もっと新しいことができるかもしれない。省エネルギー基準が厳しくなっている社会で、透明な開口を増やしたいだけの理由でガラスを使うことに対しては、どんどん圧が強まるでしょう。一方で、いろんな活動がリンクしていくためには「見える」という視覚効果がとても重要で、これも圧になる。そういうまったく異なる二つの圧があるので、ガラスの建築の可能性はなくならないと思います。ガラスは透明であると同時に、面としてとても強い存在感を持っている。それを、いいカタチで活かすことに興味があります。たとえば神宮前のプロジェクト※では、ガラスが面として揺らいでいて周りが映り込むことによって、都市の中で海のような風景をつくらうと考えています。同時に面としての存在感を消すことが求められる時もありますよね。日本電気硝子さんの見えないガラス®は正面からだとも存在していないように見える。反射の度合いをコントロールすることで、まったく違ったインターフェイスにもなり得ます。

新型コロナウイルスについてははっきりと語れる段階にはありませんが、その前に東日本大震災があったことを考えると、困難というのはそこそこの頻度で起きうということ。コミュニティ発生の起源には、ある程度の人数が集まって助け合わないで生命が脅かされるような危機感がある。危機に備えて持ちつ持たれつとの関係性を良好に保っておくには、普段からどんな結び付きをつくっていくかが重要で、そこに建築空間が介入する余地がある。リモートが推奨されて情報空間への依存が高まっていますが、基本的には実空間の中で関わり合うことを抜きにして人間の集まりを語ることはできません。

リアルな空間での結び付きと情報空間での結び付きのアクティブな関係は、コロナ禍で一気に加速しました。現在取り組んでいる新潟県小千谷市の図書館など複合施設のプロジェクでは、まさに実空間と情報空間のからみ合いを考えています。情報空間というすごくハイテクで未来都市のようなものが想像されがちですが、小千谷という3万5千人ほどの小さな規模の街が持つ歴史やのどかな風景が情報空間とからみ合った時に何ができるかを考える方が、より新鮮な可能性が拓けると思っています。

※神宮前六丁目地区第一市街地再開発事業。2022年完成予定。

平田 晃久(ひらた あきひさ)

1971年大阪府生まれ。1997年京都大学大学院工学研究科修了。伊東豊雄建築設計事務所を経て、2005年に平田晃久建築設計事務所を設立。2015年より京都大学に赴任し、現在は京都大学教授。主な作品に、樹屋本店(2007年JIA新人賞)、Bloomberg Pavilion、Tree-ness House、太田市美術館・図書館(2018年村野吾吾賞、BCS賞)、Overlap Houseなど。2022年に完成予定の「神宮前六丁目地区第一市街地再開発事業」の外装・屋上デザインを手がける。



nine hours大手町(東京都)



東戸塚教会(神奈川県)



ファイアライト®とビル建築

安全性はもちろん、意匠性も。
ビルに最適な安心の
防火設備用ガラス ファイアライト®。

熱衝撃に強く、防火に対して必要な性能を満たす耐熱結晶化ガラス、ファイアライト®。防火設備用として長年用いられてきた網入りガラスとは異なり、すっきりとしたクリアな視界を実現します。集合住宅や公共施設などのビル建築にも広く採用されています。

- 1 2階テナントでも約3.9mの天井高を確保。連窓から自然光がたっぷり差し込む。
- 2 3 内開きと内倒し、2つの開閉機能をもつドレーキップ窓。
- 4 各階のボリュームをずらすことで下の階の庇になったり、上の階のテラスや庭になったりなど外部空間を生み出している。
- 5 「3・4階の住居からは、周辺建物の屋根しか見えません。街中であって建物の上には広々とした空が広がる。そのことを最大限に活用しました。」(小室氏)



アイビス千駄ヶ谷 【東京都】

設計: KOMPAS JAPAN 一級建築士事務所
建物用途: 賃貸事務所併用住宅

商住混在の都心部で前面道路が狭く、容積率160%という厳しい条件にも関わらず、十分な収益性が期待できるテナント空間を1・2階に、開放的で快適なオーナー様の住居を3・4階に配置した事務所併用住宅です。法規をクリアすれば高さ20mまで建築可能な点に着眼。さらに、複雑な日影規制に従いつつ最大限のボリュームを追求し、1階から4階まですべて異なる床形状で構成しています。各階ボリュームをずらしたことでそれぞ

れの階に外部空間が生まれ、さらに室内との一体化で延床面積以上の広さを感じられます。元々ゆとりある庭付き戸建て住宅にお住まいだったオーナー様は都心での生活空間に懸念されていましたが、アイビス千駄ヶ谷は建て込んだ立地でも緑を身近に感じる暮らしが叶う好例。テナントと住宅では用途・機能ともまったく違うことを逆に活かし、建築のアイデンティティとして存在感を示しています。



6 4階リビングダイニングは階高を高くして天井を斜めにすることで、北側から自然光を採り入れている。



6



7



8

7 ファイアライト®の高窓がリビングダイニングに自然光をもたらす。
8 防火設備が必要な都市部の建物に、ファイアライト®なら性能面・意匠面ともにクリア。

外窓に使うことで可能性の広がりを感じさせるファイアライト®。

KOMPAS JAPAN 一級建築士事務所
小室 舞 氏

アイビス千駄ヶ谷は、全開放の引き込み窓にしてリビングとテラスを一体化し、屋外も生活空間として使えるように工夫しています。またテナント部分も、普通のオフィスでは難しい階高約4.5mと高さのある開放的な空間を重視しました。競合物件と差別化することで、収益性の向上につながっています。大きな課題となったのは開口部の防火対応で、当物件は防火設備が必要な立地。1・2階をできるだけガラス張りにするために最大サイズや価格を調べたのですが、金属サッシでは困難でした。また一方で、アルミサッシの窓が並ぶ建物はいかにも日本的な景観だと感じていました。そこに、個別認定を取得

して高さ3mの大開口にも対応できるアルスの木製サッシ「夢まど」を見つけたのです。個人的に網入りガラスがどうしても好きになれず、網のないファイアライト®が使用されていたのも好都合でした。当初はテナント部分での採用のみ考えていましたが、3・4階の住居部分の一部も防火設備にする必要があったことから自然な流れで「夢まど」を使うことにしました。防火設備とそれ以外の窓を比べても、見分けがつかないほどの自然な仕上がりに満足しています。



小室 舞 (こむろ まい)

一級建築士。京都大学工学部建築学科卒業。スイス連邦工科大学チューリヒ校留学を経て、東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修了。ヘルツォーク&ドームーロン(バーゼル&香港)で約9年間勤務した後、2018年に香港と東京に建築デザインスタジオ「KOMPAS」を設立。https://kompas-arch.com

誌面でご紹介しきれなかった「アイビス千駄ヶ谷」の写真や図面、インタビュー記事を公開しています。



1 床と天井にあらわした梁が、開口方向にシンメトリーを、個室方向に視覚的奥行きを生み出す。
 2 構造グリッドの都合による梁がカーテンボックスや壁コーナーなどの部分と揃うように、相互に寸法を調整。美しい納まりが洗練された空間をつくる。



3 2階以上に位置する賃貸住宅。手摺を付けて掃出し木製サッシにすることで、秩序あるファサードに。
 4 網のないファイアライト®入りの2連木製サッシが、大らかな眺望をもたらしている。
 5 方向を揃えた床フローリングと天井羽目板が室内に奥行きを感じさせ、床から天井までの大開口が開放感を演出。

アパートメント縁 [東京都]

設計:ラプアーキテクチャー一級建築士事務所
 建物用途:集合住宅・賃貸事務所併用住宅

それぞれ面積が異なる、オーナー様宅2世帯・叔母様宅2世帯、賃貸住宅4室、賃貸事務所1室、ビルトインガレージからなる複合建築です。複雑な構成のため不協和音に陥りがちなファサードですが、壁式コンクリート構造のグリッドを3層にわたり展開することで、秩序ある美しさを実現。ファサードの多くを占める木製サッシに、ファイアライト®はサイズ対応力でも貢献しています。

(取材協力:ラプアーキテクチャー一級建築士事務所 浅利幸男様)





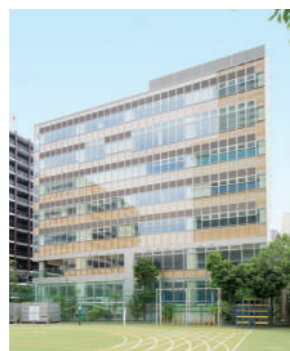
1

渋谷区子育てネウボラ 【東京都】

設計: K構造研究所
建物用途: 公共施設

フィンランドの育児支援システムであるネウボラ(相談の場)を参考に、子育てひろば、保健相談所、教育センター、子ども発達相談センターなどから構成される複合施設です。全面ガラスのカーテンウォールのファサード、ファイアライト®の窓がより開放的な空間を実現し、人と地域とのつながりを創造する拠点にふさわしい佇まいです。

(取材協力: K構造研究所)



1 靴を脱いで過ごせる3階の子育てひろば。所轄である保健所がつろげる雰囲気重視して網なしの防火ガラスを希望したことから、ファイアライト®を採用。
2 延焼ラインから外れる部分のガラスも、統一感を持たせるためにファイアライト®を使用している。



2

ファイアライト®の特長

“網なし”で視界すっきり。

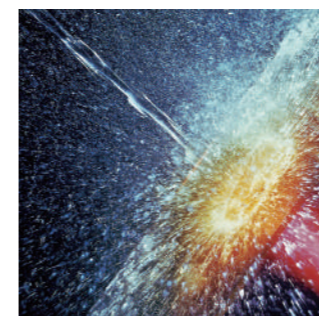
ファイアライト®は、防火設備用ガラスとしての優れた性能を備えつつ、従来の網入りガラスにはないクリアな視界を実現。防火区画を網なしのファイアライト®で区画すれば、明るく開放的な空間設計が可能になります。



網入りガラス(写真左)と、ファイアライト®(写真右)。比較すると、クリアな視界の快適さ、開放感は一目瞭然です。

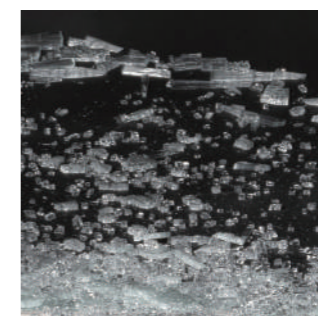
※イメージ

急熱急冷の熱衝撃に強い。



800°C以上に熱した後に冷水をかけても割れない唯一の防火ガラス。炎の広がりを食い止めます。

自然破損などの心配なし。



自然破損の危険性や錆割れ・熱割れのおそれがないファイアライト®。環境の変化に強いガラスです。

大型サイズにも対応。



クリアな大型サイズの防火ガラスのニーズに応え、特定防火設備・防火設備用耐熱結晶化ガラスとしては世界最大サイズ1,586×3,033mmのファイアライト®が新たにラインアップに加わりました。

住宅・ビル用途から、大規模施設まで。
ファイアライト®の製品情報はここから。



[窓の防火設備について]

2019年4月より、ビル用防火設備は(旧)カーテンウォール・防火開口部協会による通則的運用の停止により、個別認定となりました。また、告示改正により防火設備として性能が確認された仕様について、個別に大臣認定を受けることなく使用できるようになりました。ファイアライト®は、告示に定められた「耐熱結晶化ガラス」として使用できます。

例/個別認定仕様でのご採用: アイビス千駄ヶ谷 告示仕様でのご採用: 渋谷区子育てネウボラ ※告示の窓種やサイズは、国土交通省ホームページをご覧ください。





特集2 防災視点と ファイアライトプラス®

災害時の拠り所となる公共施設・教育施設に耐熱合わせガラス ファイアライトプラス®が採用されています。

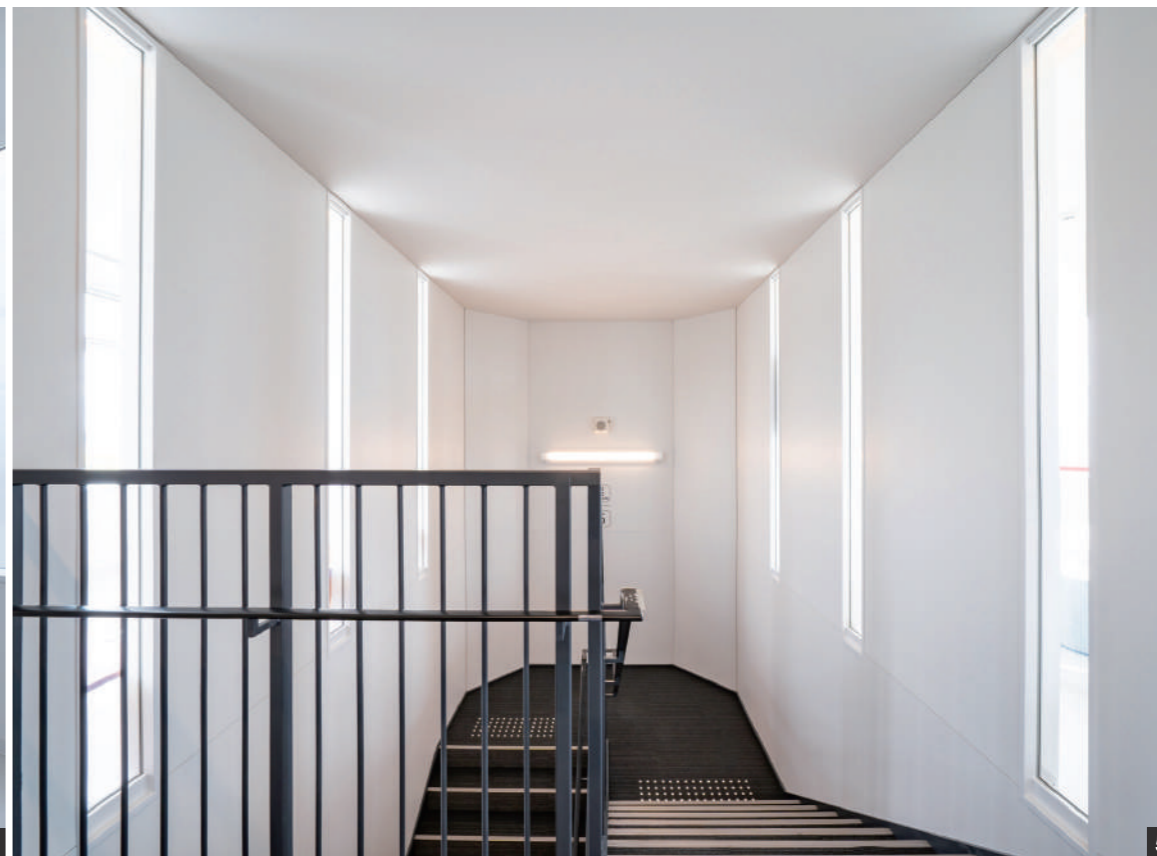
日常、快適に利用できることはもちろん、台風や大雨、地震など非常時には、防災拠点・避難所としての役割を担う公共施設や教育施設。そんな施設でガラスが割れると、散乱した破片は避難の妨げになることがあります。つまり、施設の防火ガラスには、防災の視点が不可欠。だから、万が一割れても、ガラスの破片の飛散・落下・脱落など二次災害の心配が少ないファイアライトプラス®が最適です。

旭市新庁舎
【千葉県】
設計：横河建築設計事務所

1市3町が2005年に合併して以来、行政組織が分散していた旭市。2021年、「市民に親しまれ愛されるオンリーワンの庁舎」をコンセプトに、地上6階建て・地下1階の新市庁舎が完成しました。市民サービス提供の窓口のほか、住民自治の拠点として1階に市民ホール、歴史を学ぶ場、最上階には展望フロアを設置し、市民に開かれた気軽に立ち寄れる市庁舎です。

- 1 隣接する「旭文化の杜公園」との連続性も考慮。ファイアライトプラス®の扉を採用することで開放的に。
- 2 曲面の壁にさまざまなサイズのファイアライトプラス®の窓を散りばめたデザイン。個別認定の範囲が広く、設計対応性に優れている。
- 3 ゆるやかな曲面を描く壁。旭市は九十九里海岸に面していることから、弓なりの海岸線をモチーフにとり入れた。





災害時に確かな信頼。自由な空間設計も叶えるファイアライトプラス®。

新市庁舎は、風土を反映した伸びやかなデザインが特徴で、住民の融和がシンボリックに表現されています。特にエントランスホールは2層吹抜けで、明るく開放的に。また、市街地から「旭文化の杜公園」へ抜けるルートに立地しているため、「市民の通り道になるエントランスホール」という考えの下、休日開放もされているそうです。

新市庁舎建築の背景の一つには、東日本大震災がありました。57年もの間、利用されてきた旧庁舎は、手狭なだけでなく

耐震面でも課題が顕在化。耐震性・防火性など建物そのものを強化すると同時に、これからの市庁舎のあり方として、非常時でも各組織のスムーズな連携により市民の安全と安心を支えることができる防災拠点としての役割が求められました。

隣接する「旭文化の杜公園」は、市の広域避難場所・物資集積拠点などに指定されています。そのため、市庁舎の1階のエントランスホールなどは、災害時の多目的な用途を想定。市民の一時的な避難、物資配布の拠点、ボランティア

受付窓口としても対応できます。

そのエントランスホールの吹抜け、市民ホールの出入り口扉、そして階段室の採光窓にファイアライトプラス®が使われています。耐熱結晶化ガラスを特殊樹脂で貼り合わせたファイアライトプラス®は、万が一割れても破片の飛散や落下、脱落がほとんどなく、災害時のリスクを低減できることが採用に至った大きな理由。設計の計画立案の際、定期的に行われた市民会議では「ガラス面が多いと、災害時の心配はないか」と

いう質問が出ましたが、ファイアライトプラス®の性能を説明すると不安は解消されたそうです。

また、内覧会では「明るくて使いやすい」という市民からの声が寄せられたとか。災害に強い堅牢さを備えていることはもちろん、空間の雰囲気づくりにも貢献するファイアライトプラス®は、開かれた公共建築にふさわしいガラスといえます。

(取材協力：横河建築設計事務所 鈴木光洋様)

- 4 6階の展望フロアは360度の眺望。晴天時には富士山や筑波山が見える。
- 5 展望フロアへの階段室にファイアライトプラス®のスリット窓を採用。安全を確保しつつ採光性を高めている。
- 6 2階の子育て支援センター。吹抜けに面した窓にファイアライトプラス®が採用された。



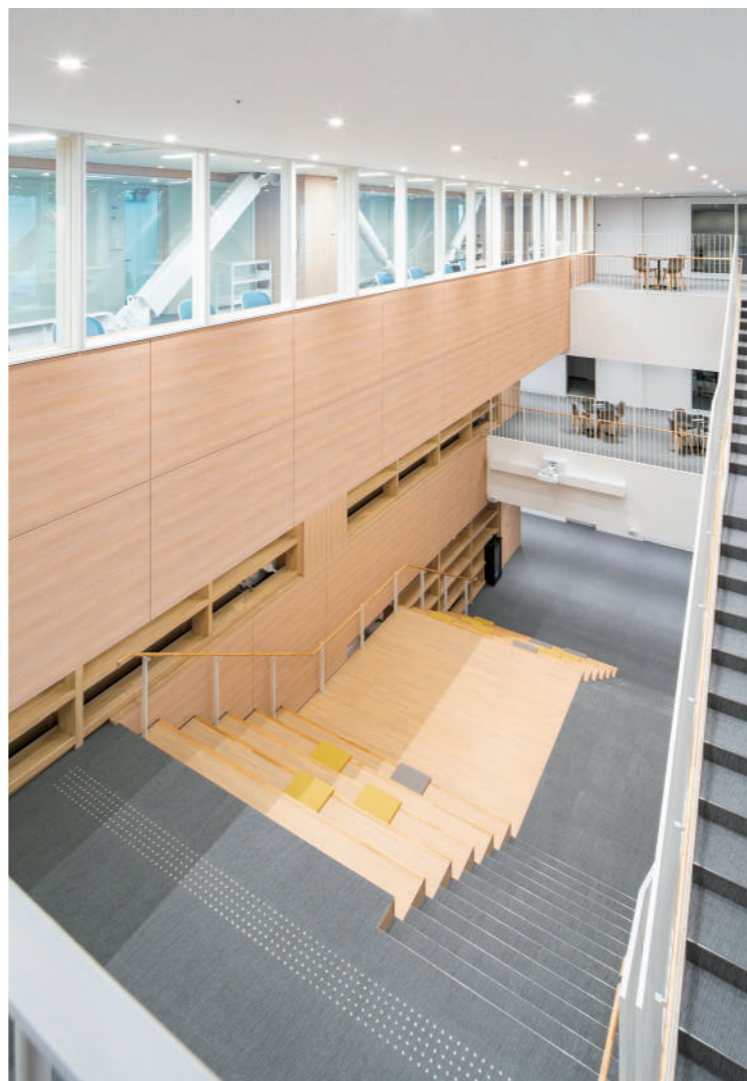


特集2
防災視点とファイアライトプラス®

ファイアライトプラス®が、健全な学びの場と安心を提供 する場を両立。

神奈川県
神奈川大学
みなとみらいキャンパス
【神奈川県】
設計：三菱地所設計

文化や経済の拠点であるみなとみらい21地区初の総合大学キャンパス。
グローバル系3学部が集い、約5,000人が学ぶ洗練された空間です。
2021年春に誕生し、イベントや講演、展示などを行う「ソーシャルコモンズ」を中心に、
多様な“人”が集い“知”が交流する、世界と地域に開かれた拠点を目指します。
高層階の研究室フロアは各学部ごとに中央に3層吹抜け空間を設け、一体感を創出しています。
吹抜け上部にファイアライトプラス®が採用され研究室内を見せることで、
コミュニケーションが芽ばえます。





特集2
防災視点とファイアライトプラス®



品川区立後地小学校
【東京都】
設計:佐藤総合計画

太陽光発電や雨水の再利用、屋上緑化など環境にも配慮した次世代の校舎。
ファイアライトプラス®は後地ひろばと呼ばれる体育館、
後地ステップと呼ばれる吹抜けの中央階段に加え、給食室にも採用。
児童たち、教員、職員…ここに集うみんなの顔が見える学校づくりが実現されています。



南島原市立有家小学校
【長崎県】
設計:大建設計

140年以上の歴史を持つ3校が統合されて
新たな小学校が誕生しました。
玄関の正面にある多目的ホールと
ファイアライトプラス®が使われた大階段は
一体化した大空間で、
児童たちの交流が生まれる場となっています。

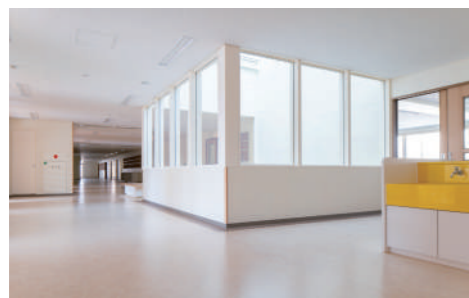
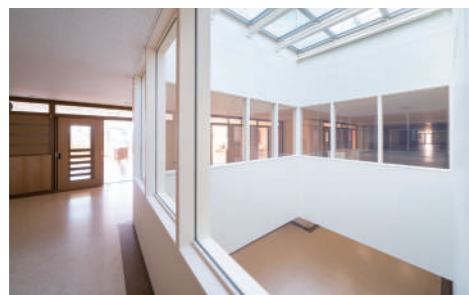




特集2
防災視点とファイアライトプラス®

中野区立中野第一小学校
【東京都】
設計:山下設計

都市部に立地する4階建ての新校舎は、2階に体育館、屋上にプールを配置し、限られた敷地を効率的に活用。2階吹き抜けのファイアライトプラス®を介して天窓からの明るい光がフロアに広がり、共用部との連続性も感じさせます。



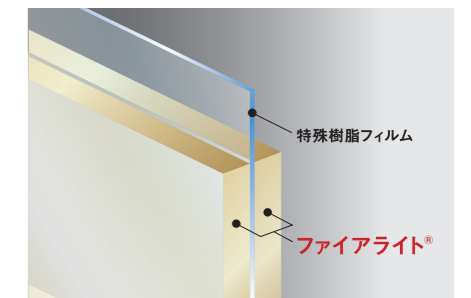
東京都立
東久留米特別支援学校
【東京都】
設計:あい設計 東京支社

2021年4月、普通科と職能開発科を設置する高等部知的障害特別支援学校として開校。一人ひとりの個性を尊重し、自立を支援する特別支援学校です。体育館は1階・2階ギャラリー部分ともファイアライトプラス®を採用。災害時の場合も、安全・安心を確保します。



安全を確保する耐熱合わせガラス
ファイアライトプラス®。

ファイアライト®を特殊樹脂で貼り合わせることで衝撃安全性を高めたファイアライトプラス®。特定防火設備に認定された唯一の耐熱合わせガラスです。



●火災の高温に耐え、
放水でも割れません。

ファイアライトプラス®は、800℃以上に熱した後に冷水をかけても割れない唯一の防火ガラス。消防活動の放水による急激な温度変化でも割れません。

特定防火設備認定品

認定品	認定番号
耐熱合わせガラス[ファイアライトプラス®]入 鋼製FIX窓 (ファイアライト4mm厚品の合わせガラス) 最大開口寸法 W1,570×H3,000mm	EA-0519
耐熱合わせガラス[ファイアライトプラス®]入 鋼製FIX窓 (ファイアライト5mm厚品の合わせガラス) 最大開口寸法 W1,200×H3,000mm	EA-0293
耐熱合わせガラス[ファイアライトプラス®]入 ステンレス製FIX窓 (ファイアライト5mm厚品の合わせガラス) 最大開口寸法 W1,200×H3,000mm	EA-0393

ファイアライトプラス®の特設サイトをご覧ください。



GLASS BRICK



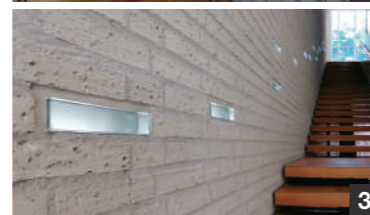
慶應義塾大学
三田キャンパス東別館
[学術資料展示施設]
(東京都)

設計：三菱地所設計
使用製品：ガラスレンガ クリア

芸術と文化の拠点を彩る透明なガラスレンガ。

地上11階建ての慶應義塾大学三田キャンパス東別館にオープンした学術資料展示施設「慶應義塾ミュージアム・commons」は、慶應義塾の文化コレクションの新たな活動の場。公有／所有の枠組みを超え、コミュニティで活用する「commons」、コレクションを巡る活動をつなぐ「ハブ」として機能する。アナログとデジタルが融合する環境で、大学に関わるあらゆるコミュニ

ティが文化財を起点に交流。展覧会、イベント、教育・研究やデジタル・アーカイブなどを通じて、慶應義塾のアート&カルチャーを社会に開いている。ガラスレンガは、1階エントランスの壁面に採用。澄み切った水をそのまま固めたような独特の質感は、アクセント以上の存在感を放ち、エントランスデザインの新たなモチーフを創り出している。



1 1階エントランス。ガラスレンガによって、自然と階上へ導かれるような演出。
2 異なる素材と組み合わせることで、ガラスを透過した光の表情が際立つ。



1 ファイアライトプラス®のエレベーターシャフトは光や視線をほど良く通し、開放感と安全性を両立。
2 マットなブラックのフレームとの組み合わせで、シックな雰囲気。



FIRELITE PLUS®

見通し良好な店づくりに
ファイアライトプラス®。

エキマルシェ新大阪Sotoeは、東海道・山陽新幹線、東海道本線、大阪メトロが集結する関西屈指の交通拠点駅に誕生した商業施設。在来線柵外コンコースにあり、通勤・通学客が日常的に立ち寄れる店舗で構成されている。女性に人気のある洋菓子テイクアウト店舗には、カラフルなタルトのピースが描かれた一角にファイアライトプラス®が使われており、視界すっきり明るい雰囲気演出している。

タルト専門店○△□
[エキマルシェ新大阪Sotoe]
(大阪府)

設計：ジェイアール西日本コンサルタンツ
使用製品：ファイアライトプラス®



1 女性・若者をターゲットとしたカジュアルな外装にファイアライトプラス®を採用。
2 菓子の形状やパッケージにもこだわりのある人気のタルト専門店。

モーターレン神戸
ハーバー神戸支店
(兵庫県)

設計：東西建築サービス
使用製品：ファイアライトプラス®

空間を引き立たせる
耐熱合わせガラス。

神戸のウォーターフロントにある港町・海・波をイメージしたビルの1〜3階に入居する高級輸入車ディーラー。最新のCI（コーポレート・アイデンティティ）に沿ってデザインされたという空間は、ブラックを基調とした内外装が落ち着いた高級感を漂わせる。ファイアライトプラス®はエレベーターシャフトに採用されており、ハイクオリティな空間と調和している。



お問い合わせはお近くの販売店まで

販売店

電気硝子建材株式会社 <http://www.negb.co.jp/>

[仙 台] 〒983-0014 仙台市宮城野区高砂1丁目1-15
TEL.(022)254-8411 FAX.(022)254-8416

*[東 京] 〒130-8513 東京都墨田区立川4丁目15-3
TEL.(03)3632-7721 FAX.(03)3632-3150

[名古屋] 〒451-0084 名古屋市西区上堀越町2丁目19-1
TEL.(052)522-5491 FAX.(052)523-3075

*[大 阪] 〒532-0003 大阪市淀川区宮原2丁目11-1
TEL.(06)6392-2711 FAX.(06)6392-2911

[福 岡] 〒812-0016 福岡市博多区博多駅南5丁目22-4
TEL.(092)483-3371 FAX.(092)482-2575

*ショールーム併設(9:00~17:30 土・日・祝日休み)



建材ニュース[環] No.83

編集・発行/日本電気硝子株式会社 [環]編集室

発行/2022年2月

